

## 荒畑寒村・大杉栄手沢本『ロシア』をめぐる

松本賢一

1

今から10年程前のことになるが、筆者はある古書店で一冊の英書を買求めた。売価がいくらであったかについては正確な記憶が無いが、恐らく千円に満たない額であったろう。特に目的があったわけではなく、自身の専門に少しでも役立つような書物があれば買っておこうという軽い気持ちであった。ドナルド・マッケンジー・ウォレス著『ロシア』がその本である。<sup>(1)</sup>

書架の片隅に眠らせておいたこの書をあらためて手に取ったのは、購入の後既に何年かを経てのことであったが、その折り著書はあることに気付いた。本書には本来の扉の前に書名のみ印刷したもうひとつの扉があり、その右上の部位に、明らかに毛筆によると思われる筆跡で、K. Arahata という書名がなされ、その下に 1910 と年号が記されていたのである。「荒畑寒村」という名前がすぐに脳裏をよぎったのは言うまでもない。この署名のある「扉」頁と本来の扉頁との間には、ロシアの人口地図が折り畳まれて綴じ込んである。この地図が栞代りとなり、署名のある「扉」頁は地図と共に表紙の方にめくれてしまうため、これまでは気付かなかったのである。

他にも何か署名なり書き込みなりが無いかと筆者は慌ててこの本を点検した。左開きの本書の表表紙見返しの右半分、俗に遊び紙と称せられる部分の右上に、K. Arahata の署名及び年号の書き方をそっくり真似る形で、H. Noda という署名と 1942 という年号がブルーのインクで記されているが、この人物については見当が付かない。更に、裏表紙の見返しを見ると、

<sup>(1)</sup>「言語文化」1-2：393 - 411ページ 1998.  
同志社大学言語文化学会 © 松本賢一

左上に一枚の蔵書票が貼ってあり、その蔵書票には、黒インクの細字で、やや癖のある書体ながら、明らかに「大杉栄」と読める署名があった。<sup>(2)</sup> H. Noda氏はさておき、荒畑寒村と大杉栄は、後に述べるように、堺利彦や幸徳秋水が始めた「平民社」以来の莫逆の友であり、最終的にはボルシェビズムとアナキズムという異なる旗印に拠ることになったとはいえ、大逆事件後の所謂「冬の時代」を『近代思想』発行という共通の事業に携わることによって、日本の労働運動及び革命運動のみならず、大正の日本文壇に少なからぬ影響を及ぼした。この二人の署名のあるウォレス著『ロシア』は、1917年のロシア第二次革命の勃発と、それによって喚起された日本国内のアナ・ボル論争に先立つ、両者の緊密な同志的結び付きの時期の記念ともなり得べき本ではあるまいか　誇張ではなく、筆者の手は震えた。本書には恐らくは異なる人物の手によるものと推定される引線が見られる。<sup>(3)</sup> 折りにつけ本書を書架から取り出し、それらの引線を辿りながら、あるいは寒村が、あるいは大杉がこの線を引いたのかも知れぬと想像するのは、筆者の密やかな愉しみであった。

言うまでも無く、ここにはひとつの問題がある。筆者はこの書物を古書店で偶然に、しかも極めて安価で入手したのであり、従って問題の二つの署名が正しく荒畑寒村と大杉栄の手に成るものであるか否かについては確言が出来ない、ということである。また、仮に二人の署名が本物であると仮定しても、本文中に施された引線が寒村なり大杉なりの手によるものであると決めてかかることも相応の危険を伴っているだろう。現に、少なくとも本書は1942年には H. Noda という第三の人物の手に入っており、本文中の引線がこの人物の手によってなされたものでないという保証はどこにも無いのである。更に、古書という物の性質上、この署名入りの『ロシア』が名も知れぬ（蔵書に署名する習慣を持たない）何人もの所有者の手を経て来たという可能性も極めて高く、そうだとすれば本書の引線が誰の手によるものであるかという詮索は遂に推測の域を出ることが無いと言えよう。

それでもなお、本書をめぐっての筆者の想像は肥大してやまなかった。署名そのものの信憑性が不確かであり、本文中の引線が誰によってなされたものであるか判然としないという、いわば二重の曖昧さも、この書物に籠められているであろう一篇の物語　それは日本の社会運動史の極めて重要な一モメントとも成り得るものである　の魅力の前にしてはものの数でも無い、と筆者には思われた。併せて、ここに述べるのがよし筆者一箇の想像、否たとえ妄想に過ぎぬとしても、本書の存在を公表しておくことは、今後の寒村研究、大杉研究、更には日本の社会思想史研究の一助と成るかも知れないという思いもまた、筆者を鼓舞するのである。

## 2

荒畑寒村と大杉栄共通の手沢本が持っている意義を述べる前に、まずはこの『ロシア』という書物そのものについて数言を費やしておく必要があるだろう。

本書の著者、ドナルド・マッケンジー・ウォレスは1841年11月、スコットランドのダムバートンシャーに生まれている。早くに両親をなくしながらも、15歳で学問への道を志した彼は、最初グラスゴー大学とエディンバラ大学で形而上学や倫理学の研究をしていたが、その後方向を転換し、フランスとドイツで法学研究に従事した。

1867年にハイデルベルグ大学で博士号を取得したウォレスは、比較法学の教授となるための準備をしていたが、ちょうどその頃、ペテルブルク在住のロシア人の友人から招待を受けた。この招待がウォレスの生涯の大きな節目となった。

元来オセツ族の研究を志して渡露したウォレスの興味は、次第にオセツトからロシアそのものに移っていった。冬の間は主としてペテルブルクやモスクヴァなどの都会で過ごし、夏期にはロシア中を旅して土地の政府当局者、地主、商人、僧侶、農民などあらゆる階層の人々と交わって情報を収集する

ウォレスの研究方法は、書齋型の研究と、今日でいうところのフィールドワークを総合したものであり、このスタイルは『ロシア』の叙述にも明瞭に現れている。結果としてロシア滞在は6年間（1870—1875）に及び、ロシアとロシア人に関する膨大な観察と資料を蓄えて彼は帰国した。帰国後もロシアでできた知人たちと文通して自らの見聞の補強としたという。

ロシアでの6年間の研究成果を世に問うきっかけをウォレスに与えたのは露土戦争（1877）を目前にした英国の世情であった。東方世界における英国の有力なライバルであるロシアに対する英国国民の興味の昂まりが、ウォレスの該博な知識に裏打ちされた、そしてそれゆえに必ずしも気楽な読み物ではない『ロシア』の出版を可能にしたのである。初版刊行は1877年1月のことであったが、34章もある大部の書『ロシア』は数週間の内に幾度も増刷され、更にその後、ウォレス自身が把握していた限りでも、フランス語、イタリア語、ドイツ語、デンマーク語、スウェーデン語、ロシア語、クロアチア語、ハンガリー語、トルコ語、ヒンドゥー語に翻訳された。ロシアについての知識に飢えていたのはひとり英国国民のみではなかったのである。1905年と1912年には著者自身による改訂版も刊行された。『ロシア』は、1917年のロシア第二次革命に至るまで、いわば標準的なロシアの解説書であり続けた。

いよいよ露土戦争が勃発すると、ウォレスはタイムズ社に請われて同社のペテルブルク特派員となり、サン・ステファノ条約の締結（1878年3月）までペテルブルクに止まった。引き続いてベルリンに赴き、ベルリン条約の締結をも彼は自身の目で見ることになる。彼の目指していた学究としての生活は、この時からジャーナリストのそれへと急速に変化を遂げていった。

以後、タイムズ社の特派員としてコンスタンチノーブルに勤務したり、インド総督ダファリン伯の個人秘書としてインドへ渡ったりしたウォレスは、1891年に英国に戻り、『タイムズ』の外報部長として腕を振るった。ジャーナリストとしての彼の最後の大きな仕事は、1905年、米国ポーツマスから日

露戦争終結条約のニュースを『タイムズ』に送ることであった。ジャーナリストとしてのウォレスの仕事は「ロシア」に明け、「ロシア」に暮れたのである。<sup>(4)</sup>

## 3

ウォレスの最後の仕事のきっかけとなった日露戦争は、衆知のように、日本国内において開戦論と非戦論の二つの陣営の対立を生み出した。1903年10月、日露開戦支持に方向転換した『萬朝報』を退社した幸徳秋水と堺利彦は「平民社」を興し、週刊『平民新聞』紙上で非戦論と社会主義を説き始めた。ウォレスの『ロシア』にそれぞれの署名を留めた荒畑寒村と大杉栄の知遇が始まったのは、この「平民社」時代である。共に秋水を慕って「平民社」に出入りするようになった二人の間に、この頃はまだとりわけて緊密な結び付きがあったわけではない。14歳の時から世の中に出て、辛い労働に耐えて来た寒村と、陸軍少尉の長男として生まれながら陸軍幼年学校を退校させられ、東京外国語学校の仏語科に入学したばかりの大杉とでは接点も少なかったであろうし、寒村は横浜、大連、東北、和歌山等々とその居場所を頻々と変えていた。それでも後に寒村は、「大杉ハイカラ」を略して「大ハイ」と呼ばれていた当時の大杉の颯爽とした姿を懐かしげに回想している。<sup>(5)</sup>

二人の交流が日本の社会運動史の中で特に目を引くものとなるのは、1908年6月の赤旗事件の頃からであろう。アメリカから帰った幸徳秋水の直接行動論を支持し、議会政策による社会改良の可能性を否定していた寒村と大杉は、「硬派」の同志としてこの事件に登場する。山口孤剣の出獄歓迎会を利用して「軟派」に対する示威運動を企てた二人は、他の同志を語らい、歓迎会の会場で二旒の赤旗を振り、革命歌を歌ったり「無政府主義万歳」を叫んだりして騒擾を引き起こした。これが赤旗事件の顛末である。この時逮捕されたのは13名。無論、寒村と大杉は逮捕者の中に名を連ねていた。そして留置場で特に過酷な取り調べを受けたのもこの二人であった。寒村は『寒村

自伝』の中で次のように書いている。

(・・・)何しろ血気の連中とて、留置場の騒ぎがまたひと通りではない。巡査が制止しても、取り調べを行なおうとしても抗争して屈しないものだから、警官はとうとう大杉と私を裸にして足をもって廊下をひきずりまわし、蹴る、殴る、ふんづける、さんざんな目にあわせ、ついに私が悶絶するに及んで驚いてやめた程であった。私は永い間の交際に、大杉が口惜し泣きに泣いたのを見たのはこの時が初めてだ(・・・)<sup>6)</sup>

他の同志と共に千葉監獄に入獄した寒村と大杉は、ここでも「一番タチが悪い」<sup>7)</sup>と目を付けられていたようである。寒村の出獄は1910年2月、大杉の出獄は少し遅れて11月のことであった。二人の出獄の間にはおよそ9ヶ月の隔たりがあり、この間に、あの大逆事件が起こっているが、このことについては後に触れる。ここで大事なはこの時の千葉監獄での生活が、寒村と大杉のその後の人生に果たした役割である。共に官憲の暴力に苛まれたという経験によって彼らの同志的結び付きを強めたということだけではない。一口にして言えばこの時の千葉監獄は二人の同志の「ロシア」に対する傾きを醸成する場であった。ただ、その傾きの位相が、寒村と大杉では僅かに異なっていたのである。

#### 4

荒畑寒村がウォレスの『ロシア』を読んだことは事実である。

寒村は1901年、13歳の時に横浜市立吉田小学校高等科を卒業しており、これが彼の最終学歴となるのだが、その後実社会で働きながら英語の夜学に通ったりしている。もともと英語の素地が皆無であったわけではない。大杉栄と共に赤旗事件で千葉監獄に収監された際(これが彼にとって最初の監獄体験であった)、寒村はただ闇雲に英書を読破していくという方法で英語を学

習し、1年半ほどの間に読書には何の不自由も感じないほどの進捗を見た。千葉監獄で彼が英語で読んだ本は小説から科学書まで多岐にわたった。この時期の読書については『自伝』にも詳しいが、後に、非合法下に創立された日本共産党の代表として秘密裡にモスクヴァのコミンテルン拡大執行委員会に参加した寒村が、その翌年にその時の体験を発表しようとした『赤露行』(1924)には次の記述がある。

(・・・)ロシアは古くから僕にとって、限りなき憧憬と思慕との国であつた。千葉の監獄で読んだレオ・ドモツチの『西比利亜の十六年』は、ロシアの革命運動に対して、初めて僕の眼を開かした書物であつた。やはり其処で読んだツルゲーニエフの小説は僕をして靡ろげながらもロシアの人間と、その気質と、その生活とに触れさせた。そうして亦、楚囚の苦をなめつゝあつた当時の僕にとつて、堪へ難き迄に自由を翹望せしめたものは高低起伏せる黒色の湿野をさまよふ放浪者の生活を描けるゴリキイの短篇であつた。

僕は出獄の後、手当たり次第にロシアに関する書物を読んだ。ケンナンの『西比利と追放制度』及びラレーズの『ロシア』の如きスタンダド・ヨークを始め、クラポトキンの自伝、ブランデスの『ロシア印象記』、ブレルウカアの『ロシア革命家列伝』及び『革命のロシア』、ステブニアツクの『地下のロシア』、シモン・ポロツクの『ロシアの牢獄』、マリイ・スクロツフ女史の『流刑囚の生涯』、曰く何、曰く何。(・・・)<sup>6)</sup>

どういうわけか、寒村の全著作の中で、千葉監獄出獄直後に読んだ本のひとつとして「ラレーズの『ロシア』」を挙げているのは、この『赤露行』の一節だけなのだが、赤旗事件の刑期を満了して寒村が千葉監獄を出獄したのが1910年2月のことであり、「出獄の後、手当たり次第に」読んだ本の一冊としてウォレス著『ロシア』が挙げられているということから考えて、本稿

で紹介している手沢本『ロシア』の K. Arahata という署名と、1910 という年号が寒村自身の手によって書かれたものであるという可能性は極めて高いと言わねばならない。千葉監獄での読書体験を契機として、寒村の眼は、ロシアの革命運動へ、更にはロシアそのものに向けられたのである。社会運動家としてのその後の人生で様々な紆余曲折を経ながらも、この時からちょうど50年後、1960年に70歳を越えた彼が著した『ロシア革命運動の曙』には、そのナイーブなまでのロシアに対する「限りなき憧憬と思慕」が色褪せることなく滲み出ている。

ところで寒村がウォレスの『ロシア』に署名と共に書き付けた 1910 という年号は、単に彼がこの本を読んだ年という以上のものを記念している。幸徳秋水、管野須賀子ら12名の処刑者を出した大逆事件が、宮下太吉の逮捕によって幕を開けたのがこの年の5月のことであった。管野須賀子はもと寒村の愛人であり、赤旗事件では寒村や大杉らと共に検挙され、2ヶ月後に無罪放免となっていた。彼女は最初のうちこそ寒村に本の差し入れなどをしていたが、やがて幸徳秋水と恋愛関係に入り、結婚した。この事を獄中で知った寒村は、出獄後二人をピストルで殺害しようと企てるが果たせず、自殺さえ考えたという。<sup>(9)</sup> 恨み抜いた幸徳と管野が大逆事件で検挙されたのはそれから間もなくのことである。師と仰ぎつつも愛人を奪った男として憎まなければならなかった秋水と、自分を裏切ったかつての愛人管野が処刑されたのは翌1911年初頭のことであったが、1910年という年は、単に大逆事件の起きた年というだけでなく、多感な23歳の青年、寒村個人にとって苦渋の記憶に満ちた年だったのである。

## 5

大杉栄がウォレスの『ロシア』を読んだという明らかな証拠は、彼の著作の中には見出すことができない。だが無政府主義の巨人バクーニンとクロボトキンを生んだこの国に対する関心は、恐らく寒村よりも遥かに早く彼の中



に芽吹いていたであろう。

大杉栄が語学に特異な才能を示したということはよく知られている。「平民社」に入入りし始めた頃には、既に英語とフランス語をものにしていた彼は、「一犯一語」をモットーとし、一回入獄する毎に外国語をひとつ習得するよう努めていた。赤旗事件で荒畑寒村と共に千葉監獄に収監されるまでに、彼はエスペラント語を完全に習得し、やや不完全ながら、イタリア語やドイツ語を身に付けていた。そして千葉監獄で習得すべき六番目の外国語として、彼が選んだのがロシア語だったということは記憶に留めておいてよいだろう。更に興味深いのは、この千葉監獄時代の大杉がロシアの文学作品を集中的に読んだ形跡が見られる事である。『労働運動と個人主義』（1915）の第3章で、大杉はその頃の事を次のように振り返っている。

（・・・）五年以前の二年半ばかりの獄中生活の間に（千葉監獄を指す 筆者）、僕は少しくロシア文学に親しみを覚えて、トルストイ（若しくはドストエフスキー）、ツルゲーネフ、およびゴリキーの各々の対平民的態度について、僕にとってははなはだ興味深かった、比較観察をしたことがある。そしてことに僕は、トルストイやドストエフスキーが平民の温順と忍辱とに、ゴリキーが平民の放恣と反抗とに、各々人生の真理を認めたことにもっとも興味深い対照を感じた。（・・・）<sup>(10)</sup>

言うまでもなく、千葉監獄に居た2年半の間に、大杉栄がロシア語の学習とロシア文学にだけ夢中になっていたわけではないが、それでも、共に監獄内で「タチの悪い」囚人と見なされていた寒村が英語を学習しながらロシアの小説や革命家の著述に読み耽っていた時期に、大杉がロシア語を学習しつつ、ロシア文豪の「比較観察」をしていた事の意義は決して小さくはない。どちらかといえば情緒的な趣のある寒村の「ロシア」受容に比べて、「対平民的態度」というひとつの物差しでロシア文豪の作品を読み比べ、トルスト

イヤドストエフスキイからは「温順と忍辱」を、ゴーリキイからは「放恣と反抗」を導き出している点に大杉の骨太い文学理解を看取することができる。大杉には幾つかのロシア文学論があるが、ここで彼が述べている、千葉監獄時代に得たトルストイもしくはドストエフスキイ観とゴーリキイ観の根底は終始一貫して変わることがなかった。無論、彼が支持するのはゴーリキイ的な「放恣と反抗」の精神である。

ロシア文学の耽読もその一部に含まれることになるが、千葉監獄時代に大杉の読書内容が変貌していったことにも注意を向けるべきであろう。それまで社会主義や無政府主義の文献に集中していた大杉の読書は、この千葉監獄の頃から、大杉独自の思想を形作るべくその範囲を広めていくからである。『獄中記』の中で、彼はその頃の心境を次のように振り返っている。

(・・・)以前から社会学を自分の専門にしたい希望があったので、それをこの(千葉監獄での 松本)二カ年半にやや本物にしたいときめた。が、それも今までの社会学のではつまらない。自分で一個の社会学のあとを追って行く意気込みでやりたい。それには、まず社会を組織する人間の根本的性質を知るために、生物学の大体に通じたい。次に、人間が人間としての社会生活を営んで来た径路を知るために、人類学ことに比較人類学に進みたい。そして後に、この二つの科学の上に築かれた社会学に到達して見たい。(・・・)かくして僕は、かつて貪るようにして掻き集めた主義の知識をほとんどまったく投げ棄てて、自分の頭の最初からの改造を企てた。(・・・)<sup>(11)</sup>

無政府主義の先達クロボトキンを神様のように崇め奉りその著作に耽溺しているだけでは、本当の意味での社会の改造などできない、と大杉は考えたのである。社会を変える為には社会の法則を知らねばならず、その為には社会を構成する人間を知らねばならない。一見「主義」の運動とは関係の無

さそうな知識をも、彼は貪欲に己の中に取り込んでいく。大杉流の「社会学」を作り上げていく為に、それは欠くことのできない作業であった。ゴーリキイの作品から「放恣と反抗」の精神を汲み出すこともそのような作業のひとつであったに違いない。大杉栄の無政府主義が外国種の翻訳ではなく、人間の自我の拡充に基を置いた、独自のものとして成長し得たのは、千葉監獄時代のこのような知的覚醒のゆえであった。

荒畑寒村がウォレス著『ロシア』をどういう経緯で手に入れたのかについては何も分かっていない。本書が寒村から大杉の手へ移ったのか、大杉から寒村の手に移ったのか、ということも分明ではない。だが、「出獄の後、手当たり次第に」読んだロシア関係書の一冊がウォレスの『ロシア』であったという寒村の記憶に間違いが無ければ、9ヶ月ほど遅れて出獄した大杉が、久しぶりに再会した寒村の手にウォレス著『ロシア』を見たのではないかという推測はあながち無理なものとは言えないだろう。そして千葉監獄で「自分の頭の最初からの改造」を試みた大杉であれば、もはや単なる「主義者」の眼で『ロシア』を読むことはなかったに相違ない。『ロシア』にほどこされた5種の引線のうち、大杉の手に成るものである可能性が最も高いと思われる黒いインクの線は、本書の第29章「農奴」に最も多く見られる。ロシアにおいて長い間封建時代の遺制として残り続けた農奴制の起源と変遷について詳細に述べられたこの章が大杉の興味を強く惹いたのだとすれば、それこそ「人間が人間としての社会生活を営んできた径路」の研究の一環であったと言える。その成果は、やがて『奴隷根性論』(1913)や『征服の事実』(1913)等の仕事に、また『相互扶助論』(1917)の翻訳に、直接的にはないにせよ反映せずにはいなかったであろう。

## 6

漸く勃興し始めた日本の社会主義運動が大逆事件によって力づくで抑え込まれた後、堺利彦は「売文社」を創立し、来たるべき運動再開の時機を待つ

た。新聞社勤めなどをして食いつないでいた荒畑寒村と出獄したばかりの大杉栄は、共に「技手」としてこの「売文社」に出入りしていたが、やがて二人は強いられた隠忍自重の状態に不満を感じ始めた。寒村の言葉を借りるならば「便々として徒らに運動復興の機運を待つよりも、むしろ進んでその時機をつくるべきではないかという考えが、期せずして二人の心中に醗酵して来た」<sup>(12)</sup>のである。「社会主義運動の復活を告げる呼び子であり、進軍ラッパ」<sup>(13)</sup>であると評された『近代思想』は、こうして寒村と大杉の二人三脚で創刊された。1912年10月のことである。寒村は編集作業の便宜を図るため、当時大久保百人町に住んでいた大杉の裏隣に転居した。政治的な発言を封じられた為に、隠れみものとして文芸雑誌の体裁を取った『近代思想』を、後に大杉は「知的手淫」と自嘲したが、彼の主要な論文の数多くがこの雑誌に発表されている。『近代思想』は大杉にとって自分流の無政府主義を、自分流の社会学を練っていく為の、またとない舞台であった。1914年9月に『近代思想』が廃刊されるまでの間、寒村と大杉の「背中合わせ」の生活状態は続いていたようである。『近代思想』を発行していたこの2年ほどの期間にも、彼らの間を何冊かの書物が行き交ったことであろう。

『近代思想』の廃刊後、1914年10月から寒村と大杉が出し始めた労働運動の機関紙、月刊『平民新聞』はほぼ毎号発刊の憂き目を見、財政的に破綻を来して、翌1915年3月にこれも廃刊のやむなきに至った。『近代思想』の発行という intellectual masturbation に飽き足らず、具体的な労働運動に携わるための第一歩としてこの新聞を見なしていた大杉にとってはこれは痛手であった。同年10月、寒村や若い同志と共に第二次『近代思想』を創刊するが、これも発禁、翌1916年1月には廃刊となった。

この第二次『近代思想』の時期から、荒畑寒村と大杉栄の連帯には亀裂が生じ始める。ひとつには大杉の女性問題や金銭問題等の生活態度に対する寒村の不満があり、またひとつには思想上の相違もあった。大杉の唱えるアナールコ・サンジカリズムに対して、寒村は産業別組合による労働運動を目指

そうとしていた。労働運動の側面における、二人のこの見解の相違は、1917年のロシア・ボリシェビズム革命に対する見解の相違につながっていくものである。以後、筆禍により起訴された寒村の裁判に大杉が乱入したことなどもあったが、二人の関係は冷めていった。この頃になってもなお、彼らの間に本の貸し借りや譲渡があったとは考えにくい。

後に、大杉栄はロシア行きを企てた事があった。1920年10月、上海で開かれたコミンテルンの極東社会主義者大会に参加した大杉は、自国の革命運動に対してコミンテルンからの掣肘が加えられる事を断固拒絶した。その際彼は、近くロシアを訪問するという約束を取り付けた上で帰国したのである。大杉が強く希望したこのロシア行きは、結局彼自身の病と国内のボリシェヴィキ派との軋轢のために頓挫した。進行しつつあるボリシェヴィキ革命を自身の眼で見ようという目論見が潰れたと知るまでのおよそ半年ほどの間、病床にあった大杉が、来たるべきロシア旅行に備えてウォレスの『ロシア』を読んだ、若しくは再読したという事も考えられないではないが、この時の彼はむしろロシアについての最新のニュースに飢えていたと考える方が至当であろう。いずれにしても、この時のロシア行きが失敗してから、寒村を含めた国内のボリシェヴィキ派や、ボリシェヴィキのロシアに対する批判を、大杉は益々強めていく。

大杉栄が官憲の手によって非業の死を遂げるのは、その僅か2年余り後、1923年9月のことであった。関東大震災の混乱のさなか、大杉が虐殺された頃、寒村は日本共産党の結党報告のために密かに訪れたモスクヴァからの帰路にあった。「限り無き憧憬と思慕」の念はかなえられたのである。だが、かつての同志たちの署名のなされたウォレス著『ロシア』はその時どこにあったのか 主を失った大杉の書架の上か、寒村の留守宅か、あるいは既に第三者の手に渡っていたのだろうか。

## おわりに

「荒畑寒村・大杉栄手沢本『ロシア』」と銘打ちはしたものの、本稿の最初でも述べたように、二つの署名が真に寒村と大杉の手に成るものであることを証明するための手段を現在の筆者は持っていない。本稿で述べた事柄は、二つの署名が本物であることを証明するためのいわば状況証拠に過ぎず、これをもって、本書がかつて寒村と大杉によって読まれたものであると断定することは出来ないのである。

本書の引線箇所をより仔細に検討し、寒村なり大杉なりの著作の中にその明らかな反映を見出し得たならば、本書が二人の手沢本であるという推定の補強材料とすることも出来よう。その作業は現在の筆者の手に余るものであり、今後の課題とせざるを得ないが、それと同時に、署名の真贋すら明確でない状況下でそのような作業に取り掛かることは、底なし沼に踏み込んだ者が、右の足を引き抜くために左足をより深く沈めてしまうようなもどかしさを伴うであろうという危惧を覚えていることも事実である。

帝政末期のロシアに関わることによって、その人生の軌跡を大きく変えてしまったウォレスの著書が、共産主義のロシアに対する評価の違いから袂を分かたざるを得なかった二人の「同志」の在りし日の強い絆を記念している

たとえそれが推測の域を出ないものであっても、一冊の古書を通じて歴史的一幕を垣間見得た僥倖に、何はともあれ今の筆者は素直に感動すべきなのかも知れない。

資料：荒畑寒村・大杉栄手沢本『ロシア』に見られる引線と書き込みについて  
本書に施されている引線は次の5種に分類できる。

a 紫の色鉛筆によるもの。フリーハンドで引かれ、アンダーラインの場合と頁横余白に数行にまたがって施した縦線の場合とがそれぞれ一例ある。またこれも一例だけ（4頁）頁右上の余白に 印を付けたものがある。

b朱の色鉛筆によるアンダーライン。定規を用いて引いたかと思われるほど真っ直ぐな引線。フリーハンドで引かれたり、頁余白への縦線の形で引かれることはない。

c赤の色鉛筆によるフリーハンドのアンダーライン。

d黒インクで、恐らくはペンによると思われる極めて細い引線。常にフリーハンドで引かれ、アンダーラインの形で引かれている場合と、頁の右余白若しくは左余白に数行にまたがって縦に引かれている場合がある。なお、目次頁に限り、大見出しの後に続く小見出しの数項目を指示する形で二重の縦線が引かれている。また、本書の冒頭に置かれたウォレスの書簡には、やはり黒インクの細字で波線が施されたり丸印が付けられたりしている。

e黒鉛筆によるフリーハンドの引線。頁の右余白若しくは左余白に本文の数行を指示して縦に引かれている場合と、本文中一語から数語を指示するためにはねるようにして引かれたアンダーラインの場合とがある。

本書への引線は、本書全体にわたって万遍なく施されているわけではない。

aタイプ、bタイプの引線は第1章のみに、cタイプの引線は第26章のみに見られ、dタイプの引線は冒頭に置かれたウォレスの書簡、目次、及び第25章、第28章から第29章に見られる。eタイプの引線は、ウォレスの書簡、序文、目次、第29章から第30章の随所に見られる。第2章から第24章、第27章、第31章から最終章の第34章までの諸章には、一切引線が見られない。

aタイプ、bタイプの引線はすべて第1章「ロシアの旅」に集中している。いずれの引線も紀行文的な叙述が為されている部分に関するもので、いかにも本書をガイドブック的な読み物として読んだ人物の手によって引かれたかの感を与える。

cタイプの引線は第26章「モスクヴァとスラヴ主義者たち」のみに見られる。スラヴ派の基本的な所説、その社会的影響力の大であったのに比して、実際にはスラヴ派の数はそれほど多く無かったこと、スラヴ派と汎スラヴ主

義の関係を述べた部分などに線が引かれている。線を引いた人物が、この第26章のみを選んで読んだということも考えられるが、逆に、この章に限り、他のタイプの引線がまったく見られないということが気にかかるともいえる。

dタイプの引線は、最も特徴的なものである。本書の目次はまず大見出しを掲げ、その章の概要を示すためのいくつかの小見出しを付したものであるが、第25章、第28章から第30章、第34章の小見出し部分には、このdタイプの二重縦線が施されており、そのうち第25章、第28章、第29章の本文には、これに呼応するように多量のdタイプの引線が見られる。すなわち、この線を引いた人物は、自らが注意して読むべき5つの章を目次で選び、そのうち3つの章は確実に読んだということになる。

第25章「聖ペテルブルクとヨーロッパの影響」の中では、19世紀前半のロシアで、文学の主流がロマン主義的傾向からゴーゴリによって代表される客観的な現実描写へ移行していったことについて述べた部分などにアンダーラインが施されている。更に、このような文芸上の新しい傾向が、「道徳的な進歩は、人間性の修正によってではなく、本能と自然の欲求が自由な捌け口と無制限の充足を見出し得るような方法で社会組織を変えることによって為され得る」との結論に読者を導くことが述べられている部分にもアンダーラインが施されている。

第28章「クリミア戦争とその結果」では、亡命した革命思想家ゲルツェンと、彼が発行して秘かにロシアに持ち込まれていた雑誌『<sup>コ</sup>ロ<sup>コ</sup>ル<sup>ル</sup>鐘』について述べただけだが、アンダーラインと頁横余白への縦線の二つを用いてマークされている。

第29章「農奴」は、農奴解放についての叙述に入る前に、ロシアにおける農奴及び農奴制の歴史的な沿革を解説した章であり、dタイプの引線が最も多い章である。後に「農奴」としてひとまとめになる階級が、古い時代においては更に3つの階層に分かれていたこと、公や自治体や地主の経済的利益



のために農民たちの移動が束縛されていったこと、モスクヴァ公国の拡大と共に農民の土地への従属がますます強まったことなどを叙した部分にアンダーラインが施されている。特に注目しなければならないのは、農奴階級成立以前の3つの階層について述べた部分(460頁)である。ここでは、dタイプのアンダーラインに混じって、eタイプのアンダーラインが the slaves、free agricultural labourers、the peasants の3つの語句に引かれており、それらの訳語「奴隷、農業労働者、農民」の3語が頁左側の余白に黒インクの細字で書き込まれているのである。このことは、dタイプの引線とeタイプの引線が同一人物によってなされたものであることを示唆しているといえよう。

eタイプの引線は、本文に関していえば、dタイプの引線との混在という形で第29章で初めて姿を見せている。第30章ではeタイプの引線のみが見られ、dタイプの引線は姿を消している。このことも、dタイプの引線とeタイプの引線が同一人物の手になるものではないかという推定の補強材料となるであろう。

eタイプの引線のうち、常に一語から数語を指示して施されている短い、はねるようなアンダーラインの数は極めて多い。固有名詞や数字などに施されている場合もあるが、その多くがこのアンダーラインを引いた人物の意図を汲みかねるものであり、甚しい場合には前置詞一語のみを指している場合もある。思うに、読み進むのと同時に興に任せて印を付けていったものであろう。

eタイプの引線のうち、数行にまたがって(2行の場合もある)頁横の余白に引かれた縦線は、第29章から第30章に数多く見られる。これらの縦線が指示する部分は内容的にも多岐にわたっており、そのすべてに言及することはできないが、第30章「農奴解放」の本文中、1861年2月19日に農奴解放令が発せられ、2000万人を超える農奴が解放されたことを述べたくだけ(499頁)の右余白に縦線が引かれ、更にその右横にやはり黒鉛筆で、筆記体の小

さな文字で Manifesto と書き込まれていることについてはここで言及しておくべきであろう。序でに言えば、その数行後（500頁）には、農奴解放の三原則が箇条書きで挙げられているが、この部分（9行にわたる）の左余白にも縦線が（一部は二重線）施されている。

#### 注

- (1) Sir Donald Mackenzie Wallace. *Russia* (Cassel & Co. Ltd., popular edition)

発行年は記載されていない。ただし、本書の巻頭に掲げられているウォレスの書簡の日付から1886年以降に発行された版であると考えられる。

形状は縦20.7cm、横13.3cm、厚さ4cm（表紙込み）。暗赤色クロス装の表紙で、ホローバックの背のみ相当に焼けて褪色している。見返しは薄い橙色である。

頁数は本文と索引を併せて630頁。本文に先立ち、主として自らの略歴を伝える著者ウォレスの書簡（6頁分）、序文（2頁分）、目次（9頁分）が置かれている。また、遊び紙と扉の間に縦42.4cm、横31.9cmのロシアの人口密度を示す地図が折り込まれている。

- (2) 本文にも書いたように本書の署名、及び蔵書票が間違いなく荒畑寒村と大杉栄のものであるか否かについて、的確な判断を下す手段が現在の筆者には無い。ここでは H. Noda なる人物の署名も含めて、三つの署名について能う限り客観的なデータを示しておくこととする。

表表紙見返しのうち、遊び紙の右上隅にブルーのインクで H. Noda と署名がある。その下に横線が引かれ、更にその下に 1942 と年号と覚しい数字が記されている。署名、横線、数字のいずれも右肩上りであるが、このH. Noda氏の署名は、次に述べる K. Arahata の署名の仕方を真似たものようである。本を閉じた場合、次々頁の K. Arahata の署名に重なるような位置に署名してあることを見ても、このH. Noda氏が、K. Arahata の署名を十分に意識していた可能性は高いと言えよう。

遊び紙の次々頁にあたる扉（ただし、著者名や出版社などを明示した本来の意味での扉は、上述の地図を挟んだ次の用紙に当たる）には、中央部分に RUSSIA と本書の表題のみが印刷されているが、この頁の右上隅に、恐らくは墨と毛筆を用いて K. Arahata と署名が為され、その下に横線が引かれた上で、更にその下に 1910 と年号と覚しい数字が記されている。署名、横線、数字のいずれもやや右肩上りである。なお、筆者は実物を見た訳ではないが、1908年、「赤旗事件」のために千葉監獄に収監された荒畑寒村に、菅野須賀子から差し入

れられたドストエフスキ著『罪と罰』の英訳本の写真が平凡社発行の荒畑寒村著作集10巻の口絵に採用されており、この本の扉に書かれている寒村の署名は、その様式も筆致も『ロシア』に見られる署名と酷似している。

裏表紙見返し、きき紙の左上方部に、白地にブルーで縁取りをした蔵書票が貼ってある。蔵書票のサイズは縦3.4cm、横2.7cmで、既製品かと推定される。この蔵書票に、黒インクの細い字で縦に「大杉栄」との署名がある。三つの文字は、下へ行くほど大きく書かれており、「栄」の字は最も大きくかつ読み易い。「大」の字は癖が強く、見ようによっては「方」という字にも見える。また「杉」の字は、最後の一画が逆方向に書かれている。

- (3) 本書に見られる引線の種類やその分布については、本文の最後に資料として掲げた。
- (4) ウォレスの生涯については、手沢本『ロシア』の巻頭に掲げられているウォレス自身の手になる簡略な自伝とThe Dictionary of National Biography, 1912-1921 (9-th impression, Oxford Univ. Press, 1980) の記述によって再構成した。
- (5) 『大杉栄逸聞』荒畑寒村著作集第5巻(平凡社・1976年) 192頁。  
『寒村自伝』同上第9巻(平凡社・1977年) 157頁。
- (6) 『寒村自伝』同上第9巻(平凡社・1977年) 254頁 255頁。
- (7) 同上、273頁。
- (8) 『赤露行』同上第4巻(平凡社・1976年) 7頁。圏点は筆者。
- (9) 『寒村自伝』同上第9巻(平凡社・1977年) 285 286頁。
- (10) 『労働運動と個人主義』大杉栄全集第6巻(現代思潮社・1964年) 254頁。
- (11) 『獄中記』同上第13巻(現代思潮社・1965年) 203頁。
- (12) 『寒村自伝』同上第9巻(平凡社・1977年) 317頁。
- (13) 近藤憲二『一無政府主義者の回想』(平凡社・1965年) 16頁。

#### 参考文献

- ・ The Dictionary of National Biography, 1912-1921 (9-th impression, Oxford Univ. Press, 1980) .
- ・ 『大杉栄』(日本の名誉 46、中央口論社、1969年)。
- ・ 高野澄『大杉栄』(人と思想 91、清水書院、1991年)。
- ・ 安成二郎『無政府地獄』(新泉社、1973年)。

Key words: Russia, Wallace, Arahata, Osugi.